

ひろしの声 上田 藤市郎

ロシアとウクライナの戦争がまだ続いている。どのような経過を経て、われわれは戦争にまきこまれていくのだろうか。今日そのような兆しが見えてくるようなのだが、最初は、敵国が想定される。それが共通の認識であるかのよう定着していく。そこで防衛の発想が来る。そのための兵器と兵員、予算の必要性だ。その理由は、国土、国民、つまり自分や家族を守るためなのだとなるから、この意見に反対するのはかなりむずかしい。つまり、愛国心の無い人間、非国民ということになる。この避けられない戦争という論理は、国家主義、全体主義の形をとって拡大するので、戦争に反対する人間は、多数派の中で孤立し肩身の狭い立場に追い込まれる。政府が戦争推進に踏み切ると、情報、教育、経済活動、自治会等の様々な分野で宣伝が推進され、その前に、法律上の特例が発せられる。そのときの法治国家では、戦争に反対する者は、国家反逆者となる。ここで平和主義者はどんな知恵を培い、戦争回避の力量を発揮できるだろうか。それは、幅広い想像力ではないだろうか。戦争は、国家相互すべての人々の生活や人生を悲惨、非道、破滅に追い込むものだ。しかし、一旦、動き出した流れを止めるのは至難の業だ。それが非力であるから、今も戦争が絶えない。

「藤樹かるた」の紹介⑥

(企画広報委員会)

（かるたと解説）

もう一杯を

も ひかえて帰る 村の人

藤樹先生が酒を売って暮らしを立てておられた時の話。村人が酒を買いに来ると、「今日はどんな仕事をなさったか」と尋ね、その仕事の程度に従って「今日はこの位におきなさい」と売る量を加減し「もう少したくさん売って下さい」と頼んでも余分には売られなかった。このようにされたので村人は酒を控えるようになり、また、酒代に困るような者はいなくなった。



せ 先生の 徳を学ぶ 立志祭

藤樹先生十一歳の年に、中国の「大学」という孔子の教えを説いた本を読まれ、立志を思い立たれたのちなみ、毎年三月七日（先生の誕生



す 澄みきった 肱の川面に

藤樹先生が青年時代を過ごされた大洲の町には、先生が広められた良知と徳の教え見守るように、大洲城の天守がそびえ、ゆったりと流れる肱川の川面に美しく映えている。



日)に高島市の小学校三年生の全児童が、立志祭を行っている。お話を聞いたり、藤樹読本の感想文を発表したり、藤樹先生に関わる学習をしている。

藤樹かるた制作委員会委員

足立清勝・飯田典子・石黒紀代子・北川暢子・清川貞治・高谷美智子・山本義雄 (五十音順)

今の「藤樹かるた」は、三代目!

六回に分けて紹介してきました「藤樹かるた」は、今回が最終です。平成二十年に制作されたこのかるたは三代目とのこと。このかるたの前身(二代目)は、町村合併の前、昭和五十八年に安曇川町教育委員会が制作された絵入りの歌かるたです。

二代目の基になった初代のは、青柳小学校で制作・活用されていた四十四文字にまとめた文字だけの「藤樹かるた」であるとのこと。残念ながらその実物は確認できませんでした。そこで、二代目のかかるたの中から、「と」の札を紹介して、終わりとします。

と 遠く居て 母のあかぎれ 涙あり



「藤樹かるた」の紹介に当たり、当会初代会長の上田藤市郎先生に多大なご教示をいただきました。